

利常は神田邸に居り、世子光高は辰口邸に在つた。翌年利常神田邸に於いて辰口邸の興造を指揮し、冬に至つて成り、光高は新夫人の入興を迎へ、十六年六月利常致仕の後裔に、に住し、十七年三月廿八日徳川家光再び之に臨んだ。正保元年二月六日綱紀が山王社参の後休憩した時、慶安元年四月十七日八條宮智忠親王の綱紀を訪ひ給うた時にも、皆神田邸と記してある。三年四月十九日神田邸類焼し、殿閣舎屋皆災を免れなかつたが、城内の富山・大聖寺二侯の邸は僅かに事なきを得たので、利常は利治の館に難を避けた。この年五月十九日利常江戸を發して小松に歸り、四年三月参勤して利次の館に入つたが、次いで殿閣の新營竣功し、八月廿一日移徙の儀を行つた。明暦三年辰口邸焼失し、綱紀難を神田邸に避け、爾後常にこゝに在つた。同年牛込邸を幕府に納め、代へるに駒込邸四萬歩の外、本郷邸の南に接續する藤臣の近藤登之助配下の同心本多丹下・朝比奈左近・坪内惣兵衛等屋敷二萬坪を受けた。その同心屋敷を得たのは七月九日である。萬治元年七月廿六日綱紀の夫人を迎へたのも亦この邸で、諸書に神田邸とも本郷邸とも記されるが、爾後に在りては神田邸の名再び記録に見えない。二年本郷邸門前の道路狹隘なため、民地を購うて之を擴張した。天和二年十二月廿八日本郷邸類焼し、綱紀及び公女等駒込邸に假屋を構へて居り、翌三年三月廿一日より初めて本郷邸を稱して上屋敷といひ、貞享四年その殿閣竣成したので、九月十九日これに移つた。次いで元禄十四年十二月廿二日徳川綱吉は綱紀の邸に臨むの意あることを傳へた。因つて舊館を毀ち、

十五年二月四日新始を行ひ、四月十一日竣成したので、綱吉はその月廿六日を以て駕を枉げた。十六年十一月廿九日この邸亦類焼し、前年の御成御殿は烏有に歸した。後享保十五年正月十二日根津の火災に本郷邸焼失し、元文三年正月廿九日大聖寺藩邸より出火して、加賀藩邸の割場・御作事所等を失ひ、安永元年二月廿九日類火によりて西御殿等焼失し、文政八年十二月九日には自火を發して、邸内北の居室を焼いた外、餘炎池之端に及んだ。十一年三月十一日將軍徳川家齊臨邸し、弘化三年正月十五日本郷丸山の火に我が望火樓亦焼け、嘉永三年三月廿一日將軍徳川家慶臨邸し、安政二年十月二日の地震に大害を受け、明治元年閏四月十七日本郷春木町の災に類焼した。本邸の面積凡べて十萬三千八百二十一步、外に萬治二年に收めた本郷六町目の百一步を加へ、その中一萬千八百八十八歩を富山藩邸、五千七百六十二歩を大聖寺藩邸に充てた。同年十二月廿四日木挽町築地なる元淀藩主稻葉氏の邸を賜ふに及び、之を上屋敷と稱し、本郷邸を中屋敷、平尾(板橋)邸を下屋敷、駒込(巢鴨)邸を抱屋敷と稱した。二年本郷五丁目六丁目の抱屋敷を返納し、三年五月九日築地邸を返上して、筋違御門内(相生橋内)なる元福山藩主阿部氏の邸を興へられ、八月又筋違橋邸を返上して、本郷を官邸、平尾・巢鴨を私邸とした。四年二月巢鴨を還し、七月二十日本郷邸の一部一萬二千六百七十坪を私邸とし、その他凡べて返上した。

ボナンザイシユウ 凡山遺集 二册。杏立著。漢詩百五十三首・漢文十二編を收めたものに過ぎぬが、その中天保末年富山侯に獻策した淺邸私議には、據夷説の迂愚を罵倒して識見の尋常ならざることを示してゐる。本書は著者の歿後、明治廿六年門人小西有英・岡田正久の刊行したものである。

ホンジドウ 本地堂 白山本宮にて白山三所權現の本地佛を祀つた堂宇をいふ。その殿摩壇は古へ談議所に在つたのを、一向一揆逆亂によつて破却した爲、本地堂と一つにしたものであつた。

ホンジユウジ 本住寺 珠洲郡正院に在つて、日蓮宗に屬し、永祿二年の創立といふ。開基且那野石見守の肖像は今も藏せられる。

ホンジヨウ 本庄 石川郡善性寺文書に見ゆる本庄は、富樫庄の本庄のことで、四十萬村を指すのであるといはれる。

ホンシヨウガツ 盆正月 藩侯の製封・入部・昇官、又は世嗣誕生の如き嘉儀ある際、庶民をして業を休み祝意を表せしめるを盆正月といふ。蓋し盂蘭盆と正月との歡樂を一時に悉くすの意で、作り物を構へ、獅子・祇園・舞等を繰出し、全市惣祭禮の如き觀を呈したが、前田齊廣・齊泰二侯の頃に及んでは益規模の大を加へ、催物の目錄を記した一枚刷りへ發行せられることになつた。盆正月がいつから初つたかは明らかでないが、凡そ綱紀の中期に起つた如くに思はれる。今金澤に行はれたものを記録に徴するに略左の如くであるが、尙脱漏があらう。遠所の町でも各獨自に催したやうである。

享保十年四月廿八日から晦日まで三日間。前田宗辰の生誕に因る。

延享二年八月十一日・十三日の兩日。前田宗辰の相續に因る。

延享二年十一月十一日。前田宗辰の中將昇任に因る。

延享四年二月十一日・十三日の兩日。前田重熙の相續に因る。

延享四年五月十五日・十六日の兩日間。前田重熙の入國に因る。

延享五年(寛延元)二月晦日・三月朔日の兩日間。前田重熙入國祝賀能の終了に因つて、地子町に盆正月を行つた。

寶曆三年六月四日・十三日の兩日。前田重熙の相續に因る。

次に明和八年前田治脩の相續と、安永元年中將昇任の際にも盆正月が行はれたらうと思はれるが、未だ記録を得ぬ。

寛政五年正月六日・七日の兩日間。前田治脩の參議昇任に因る。

寛政七年四月六日。前田治脩の歸國に因る。

寛政九年四月十五日。前田治脩の歸國に因る。

寛政九年二月廿三日・廿四日の兩日間。前田齊廣の生誕に因る。

寛政十一年五月十九日。前田治脩の歸國に因る。

享和二年三月廿七日・廿八日の兩日間。前田齊廣の相續に因る。

享和二年十月廿六日。前田治脩の歸國に因る。

享和四年二月六日・七日の兩日間。前田齊廣の子裕次郎が嫡子となつたに因る。